

(1) 大地と一体となった集落

集落では、大地のうねりを読み取り生かすようにして空間が配置されてきました。緩やかに湾曲するミチの形と沿道の建物の配置、屋根並みなどに大地の起伏を感じることができます。

○地形の凹凸を表現する、連なる屋根並み

- ・集落の下方から見上げる時、上方から見渡す時に、集落は地形の凹凸と一体として感じられる

○ミチに寄り添うイエ

- ・緩やかに曲がりくねる道と、道に沿って配置される塀や建物が、地形を表現している

高低差を表現する図



藤尾町の集落構造



萩の台地区



鹿畑町



高山町



西葉畑町



萩の台地区



高山町(西大門)



集落の中で受け継がれてきた伝統の中には、周辺住民の間で共有されている暗黙の了解や、風土に合った技術と形態、共同空間と私的な空間のゆるやかな関係性などがあります。これらは統一感のある建物をつくりだし、風格を感じさせる集落景観を形成する要因になっています。

○受け継がれる暗黙の認識

- ・地域の中で語り継がれてきた、言外の認識が暗黙のルールとなっていて共有されている

・市南部



藤尾町

北と南で異なる、暗黙のルールについて（分析中）

・市北部



高山町

○年月を経て洗練された形態と意匠

- ・材料と、風土に合った建築の技術が、固有の形態や色彩をつくり出す。調和のとれた景観を形成する要素となる

・石垣



丹念に石を積み上げ、強固に固めた姿は安定した印象と存在感を見る者に与える。平地の少ない谷部などで多く見られる。

○ナカとソトを緩やかに区切る敷際

- ・生活感がソトに伝わり、ソトの気配がナカから透けて見える敷際は、個々の生活と公共空間での動きのやりとりを可能にしている

・生垣（集落内）



生垣は「垣間見る」ことを可能にする。さらに季節の移り変わりをも感じさせ、生活に潤いを与える。

・生垣（街道沿道）



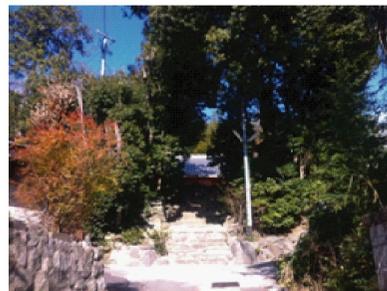
特に往來の多い街道沿いでは、透過性の低い厚い生垣と、中木の組み合わせで、程よく遮蔽されている。

・樹木



建物への出入口が直接視線にさらされないように、中木がほのかな目隠しとなり、また粋な風情も醸し出している。

・樹林



寺へ続く道に樹林が生い茂ることで、境内の信仰の空間と、日常の生活の空間を分け、雰囲気も切り替えさせる。

・大和棟



大和棟は、茅葺きの切妻大屋棟（本棟）の左右両側に、数列の平瓦二、三列と、丸瓦で吹き降ろされたタカヘが付いたもの。ここは主屋の床を張った部分にあたり、クド（竈）のある土間部分の屋根は瓦葺の落ち棟であり、檜煙出しが載せられている。生駒市周辺では、台棟生駒型という独自の形態も見られる。

・長屋門



間口の広い建物の中央付近を通り抜けできるようにした門。門の戸口の扉口の両側に連なる部屋は、物置や厩などに用いられた。格式を示すためにつくられることもあった。

・農家住宅の構造（近景）



典型的な農家住宅は、主屋と、納屋や土蔵などの付属から構成される。生業を感じさせる風景を形成する。

（遠景）



1960年代に生駒谷の谷筋の平地部から始まった住宅団地の開発は、年代を経るにつれ生駒山麓や矢田丘陵の斜面地などの標高の高いエリアに広がっていきました。こうした開発によって、骨格となる地形と対話するように、視線の先に山が見える通りや眺望の開ける場所が生み出されてきました。

○山あて

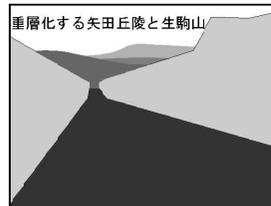
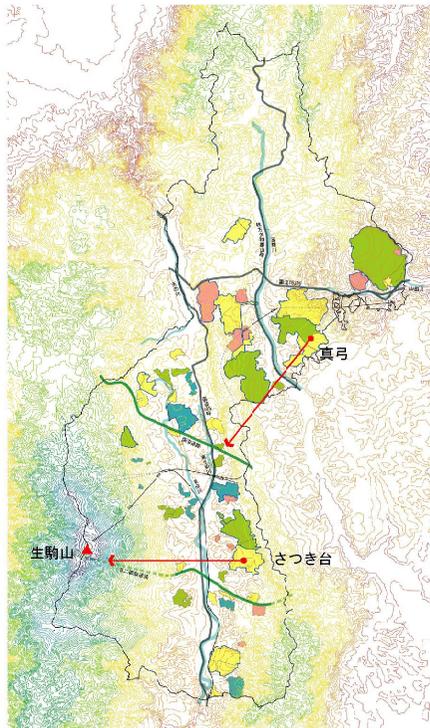
- ・通りの先に生駒山や矢田丘陵が見えることが通りに方向感覚を生み出し、それはまちのアイデンティティの形成にもつながる



さつき台



真弓



生駒山へ向かう通り



矢田丘陵と生駒山へ向かう通り

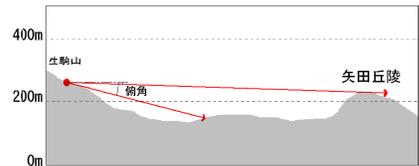
○眺望

- ・市街地への俯瞰や屋根越しに見渡す生駒山への眺望は、骨格となる地形を視覚的に感じさせる



光陽台

- ・市街地を俯瞰できる公園からの眺望
- ・俯角が小さく自然な広がりを感じる
- ・矢田丘陵の緑の帯が見える



※高さ方向を4倍に拡大



南山手台

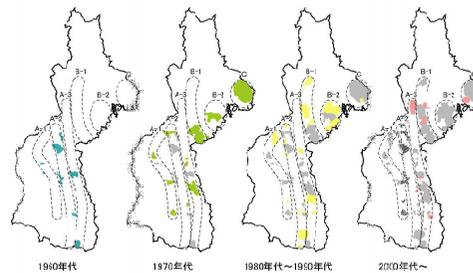
- ・住宅の屋根越しに見る生駒山
- ・仰角が比較的大きく存在感がある
- ・コンケイブ（凹）地形で奥行きを感じさせる



※高さ方向を4倍に拡大

年代による住宅団地開発の動向

- 1960年代 生駒谷の谷筋の平地部を中心に、一部や田丘陵の西向き斜面などで開発ははじまる
- 1970年代 矢田丘陵の西向き斜面、生駒山麓の東向き斜面での中小規模の開発、富雄川流域の斜面や山田川流域の南向き斜面などでの大規模な開発が進む
- 1980～90年代 970年の立地傾向がさらに進むが、比較的高い標高のエリアでの開発が多くなる
- 2000年代～ 矢田丘陵の西向き斜面や東向き斜面を中心とする中小規模の開発の他、山田川流域の南向き斜面でも開発が進む。



街区や敷地の形状と大きさは街並みを構成する基本的な要素であり、街並みの基盤とも言えるものです。これらの基盤は市街地が開発された年代ごとの時代性を反映したものとなっています。それぞれ基盤に応じて通りの街並みをつくる敷地の表情が生み出されています。

○通り空間の骨格

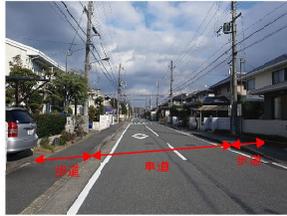
- ・道路空間と敷地のセミパブリックな要素が通り空間の骨格となる

歩道のない道路



萩の台

歩道のある道路



ひかりが丘

歩道と街路樹のある道路



北大和

オープン外構で駐車スペースがある敷地



美鹿の台

○道路と擁壁の関係

- ・道路と擁壁の関係は通りの街並みを支配する

道路に面した擁壁がない



道路に面した擁壁がある



鹿ノ台

西白庭台

○道路と建物のプロポーション

- ・道路及び敷き寄せ空間の幅員 (D) と建物の高さ (H) のバランス (D/H) が通りの均衡をつくる

W=6m



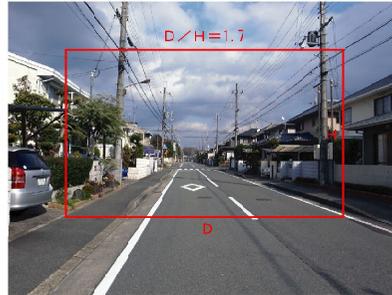
あずか野

W=8m



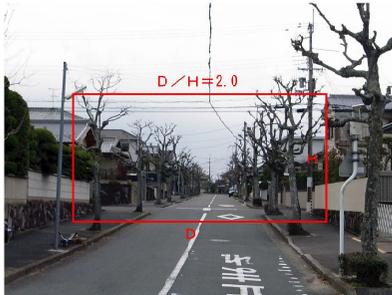
生駒台

W=10m



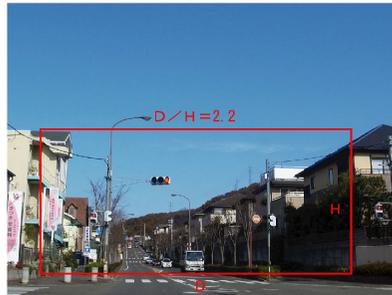
ひかりが丘

W=12m



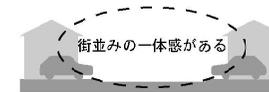
真弓

W=16m

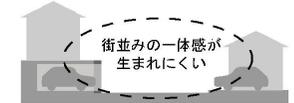


さつき台

- ・道路の幅員Dと建物の高さHプロポーションD/Hによって通りの囲まれ感が異なる
- ・戸建て住宅の場合には建物の高さHはほぼ同じであり、道路の幅員Dによってプロポーションが決まる
- ・道路の幅員が6m~8m程度であればD/Hは1.0前後となり、囲まれ感が生まれる
- ・道路の幅員が広くなると囲まれ感よりも開放感が生まれる



街並みの一体感がある



街並みの一体感が生まれにくい

坂道の下から見上げると擁壁の印象が強くなる



光陽台

坂道の上から見おろすと擁壁の印象は弱まる



美鹿の台



擁壁の印象が強い

擁壁の印象が弱い

街区と敷地の方位や形状・大きさは街並みを構成する基本的な要素であり、街並みの基盤とも言えるものです。これらの基盤は市街地が開発された年代ごとの時代性が反映されたものとして整備されてきました。通りの街並みをつくる敷地の表情は、街並みの基盤のあり方に応じて生み出されています。

○通りの方向感覚

・斜面方向との関係や方位によって両側で異なる敷地の表情が通りの場所性を際立たせる

東西方向の通り



生駒台

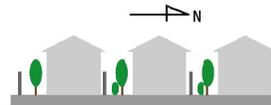
南北方向の通り



西白庭台



・敷地の南側に庭がとられることが多い  
・庭の緑が通りに表出する



○敷地面積と緑化

・敷地面積によって敷地内に確保できる緑のボリュームや配置が決まる



65㎡程度  
・南北方向の街区の場合には、敷地内にまとまった緑のスペースを確保することが難しい



180㎡程度  
・東西方向の街区の場合には、敷地に南側に小規模な緑のスペースを確保できる



210㎡程度  
・敷地内の南側にまとまった緑を、また西側や東側にも小規模な緑のスペースを確保できる



430㎡程度  
・敷地内の建物の周囲にまとまった緑を確保できる

○時代性の表出

・擁壁のしつらえや敷地の外構には開発された年代の時代性が表出する

1950年代の開発地



東生駒

1970年代の開発地



鹿ノ台

1930～1990年代の開発地



白庭台

2000年代～の開発地



西白庭台

	開発面積	戸数	1戸あたりグロス面積 (開発面積/戸数)
1960年代	約46ha	約620戸	約750㎡/戸
1970年代	約300ha	約6,320戸	約470㎡/戸
1980～90年代	約247ha	約6,200戸	約400㎡/戸
2000年代～	約48ha	1,270戸	約380㎡/戸

※開発面積の合計が10ha以上の戸建て住宅団地

景観形成の基本原則  
2-2市街地開発の文脈

(4) 人々を迎え入れる駅前空間

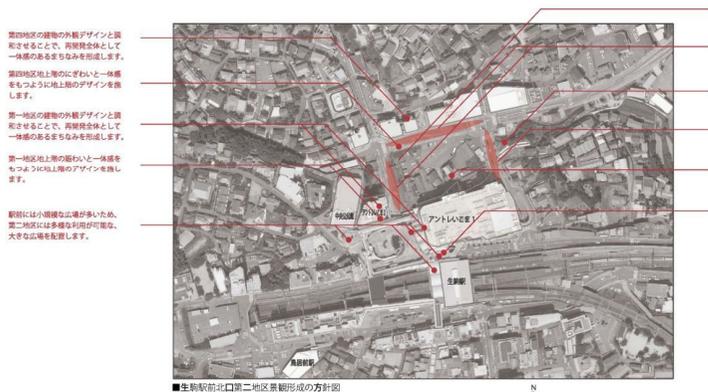
駅前には市外からの来訪者を迎え入れ、まちの印象を左右する“顔”となる空間であり、景観形成上非常に重要です。印象を高めるべく、駅舎や駅前空間の整備、再開発事業等が一定のコンセプトに基づき行われ、周辺の景観形成にも広がっています。

○第一印象を決めるまちの“顔”

・駅は市外から訪れる人にとってそのまちの第一印象を決めるまちの“顔”であり、市街地再開発事業等を核に一定のコンセプトに基づいて景観形成が行われている

○生駒駅

・北側は駅前北口市街地再開発事業が順次進行中であり、地区全体の景観形成の基本方針として生駒の玄関口としてふさわしいにぎわいとのおいが感じられるまちづくり、山なみと調和する良好な眺望景観に配慮したまちづくりなどが位置づけ  
・南側は生駒山系への眺望が良く望める一方、民間建築物（テナントビル）が主に立地しており、北側と比して屋外広告物などの要素が多くなっている



南北をつなぐ歩行者デッキを計画します。歩行者に配慮を促すため、歩道幅を確保するデザインとします。  
第一、旧地区内の道路（春日小中学校、松ヶ丘通り）は趣向がより際立つようデザインします。  
駅前駅舎エリアに対して正油感を軽減する建物デザインとします。  
第三地区内の道路（新庄通り）は趣向の無い、落ち着いた趣向になるようにデザインします。  
生駒駅前不況している趣向を軽減します。  
駅前には小規模な広場が多いため、第二地区には多様な規模の広場を、大きな広場を配置します。



生駒駅北口：アントレいこま2・駅前広場



生駒駅北口：第4地区商業エリア



生駒駅南口：生駒駅駅舎と生駒山方面



生駒駅南口：民間ビルの建ち並ぶ景観

○学研奈良登美ヶ丘駅

・奈良市と接しており、平成18年3月に開業、土地区画整理事業が実施され新市街地が創出  
・このような新市街地にふさわしい良好な広告景観の形成を図るため、平成17年4月に奈良県屋外広告物条例による景観保全型広告整備地区に指定



学研奈良登美ヶ丘駅：駅北口の景観



学研奈良登美ヶ丘駅：駅南口の景観

○東生駒駅

・近鉄が奈良学園前や生駒台の宅地造成の経験を活かして大規模住宅地開発を進め、それに伴い駅前広場整備が進む  
・駅舎内に商業施設が設置される他バスターミナルも設けられ、谷田大路線沿道に医院、銀行等が建ち並ぶ  
・国道168号の修景整備も実施



東生駒駅：駅舎と駅前広場



東生駒駅：駅前広場を取り巻く景観

○駅を核とした連歌式の景観

・一定のデザインコードに基づき、地区の景観を特徴付ける駅舎・駅前広場等が整備されている。さらに、その景観に即した・調和した形で隣接する建築物等も連歌のように連鎖的に計画・建設され、地区一体で統一した景観を形成している。  
（連歌・・・和歌の上の句（五・七・五）と、下の句（七・七）を多数の人たちが交互に作り、ひとつの詩になるように競い合っ

○白庭台駅

・白庭台住宅地の玄関口として一体的に整備  
・病院、マンション等が調和する形で計画、立地



白庭台駅：駅前の景観



白庭台駅：駅前の景観

景観形成の基本原則  
2-3 境界の空気

(1) 機能的でありながら調和した  
幹線道路の空間

幹線道路沿道は日常の暮らして車の中から目にふれる機会が多い景観です。車の利用に適した形で機能が重視される傾向にありますが、隣接地や周辺との調和、しつらえや演出の工夫などを採り入れ、機能的でありながら一定の調和が取れ、気持ちの良い沿道景観を創っている取り組みが見られます。

○通りを意識した連歌式の景観

- 沿道の景観の特徴、雰囲気即した・調和した形で隣接する建築物等も連歌のように連鎖的に計画・建設され、沿道の景観の統一感を演出している



【沿道の色彩との調和】

- 茶系のストリートファニチャーが整備され、建物の屋根・サブカラーにも同色系が配され、落ち着きを醸し出す。

国道168号沿道



【緑のうるおいの連続】

- 歩道や中央分離帯の植栽が連なり、また沿道の樹木も点景を添え、うるおいある緑のつながりを体感できる。

国道168号沿道

【スカイラインの連続】

- 隣接建築物との関係に配慮した規模を保ち、空が整って見える景観を創っている。



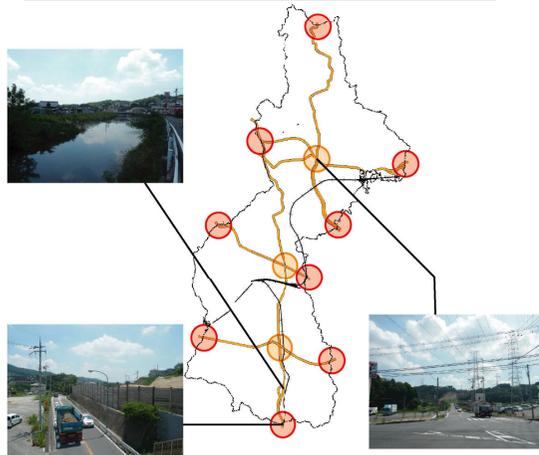
県道生駒停車場宛木線に接続する道路

【省かれた要素】

- 電線が地中化され、余分な要素がなく、すっきりとした沿道景観を形成している。
- それにあわせて沿道の建築物もことさらに主張することなくなじませた規模・形態・意匠としている。

○結節点

- 市域と幹線道路の交わる場所は、来訪者の印象を左右する。
- 道路同士が交わる場所は、焦点として人の流れが集中し、印象を左右する。
- 幹線道路沿道の橋の上などから、竜田川、生駒山系などの眺望が見晴らせる場所がある。



※注：整備中の写真

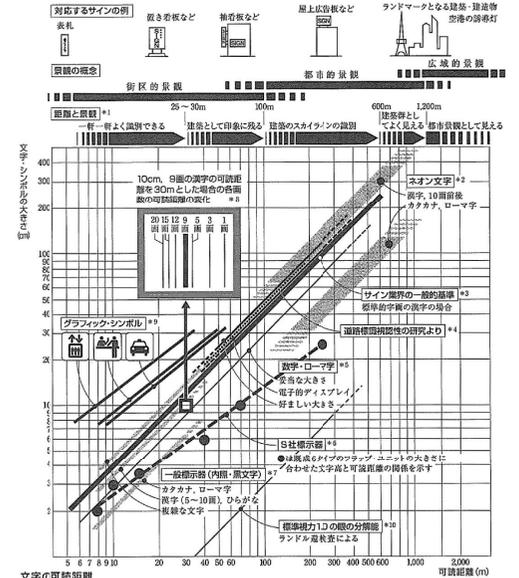
○情報の整理

- 屋外広告物は得てして突出しやすいが、情報を整理し、かつ景観になじませる作法を採り入れているものが、結果として店舗の個性の効果的なアピールにつながっている。



【適切な情報提供】

- 過度に突出することなく、自動車からも視認しやすいよう情報量の整理がなされている。
- (過度な情報は見る側も判別できず、景観も損ねる)



文字の可読距離

※1 列挙空間の形成 / 内閣府建設省 国土利用政策局

※2 国土利用政策局「国土利用政策局 国土利用政策局」

※3 国土利用政策局「国土利用政策局 国土利用政策局」

※4 国土利用政策局「国土利用政策局 国土利用政策局」

※5 国土利用政策局「国土利用政策局 国土利用政策局」

※6 国土利用政策局「国土利用政策局 国土利用政策局」

※7 国土利用政策局「国土利用政策局 国土利用政策局」

※8 国土利用政策局「国土利用政策局 国土利用政策局」

※9 国土利用政策局「国土利用政策局 国土利用政策局」

※10 国土利用政策局「国土利用政策局 国土利用政策局」

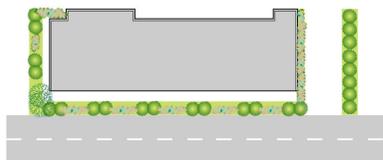
出典：『屋外広告の知識（第2巻）デザイン編』  
「屋外広告の知識（デザイン）」編集委員会 編

○緑のしつらえ

- 敷き際に緑を配置し、沿道景観に潤いを加えている。

【沿道のしつらえ方】

- 沿道の街路樹等に即して緑を沿道に配置すると、沿道の印象も高まる。
- 資材置き場等は都市機能上必要なものであるが、乱雑な状態で置かれていると、心理的不安感を与える。
- 植栽や塀などで目隠しをするなど、適度なしつらえ方がなされれば、不安感は軽減される。



【演出】

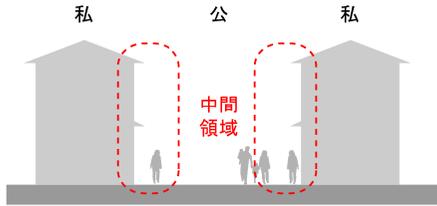
- 歩道沿いに花で彩りが添えられており、歩く人の目を楽しませる。
- 手入れが行き届いた様子に好感が持てる。



生駒の商店街は宝山寺詣での参詣道を中心に線状に発展し、旅館など接待のための店舗が軒を連ねました。現在は地域住民の買い物の場となっていますが、一方で往時の業態・たたずまいを色濃く残しています。また、商店が通りに面して様々な演出・工夫を採り入れてきました。こうした作法がにぎわいを形づくっています。

○公と私の中間領域

・商店街の道路（公）と店舗（私）の間の中間領域で、商品を陳列したり、ディスプレイで演出したり、店主が客とコミュニケーションを取るといった行為がなされ、にぎわいを創り出している。



【陳列】

・商品をアピールするために軒先に商品を陳列、顔が見えるコミュニケーションで商品を案内する。  
・なかには通りにはみ出しているものもあるが、通りのにぎわいの演出に一役買っており、昔からの商売の風景として地域になじんでいる（下写真）。

【演出】

・七夕など季節感を感じる演出や、花などで彩りを添える演出など、店主が協力して来街者を楽しませる演出を採り入れている。  
・統一的な演出がなされると、通りとしての一体感が生まれる。



本町商店街 (昭和45年頃)  
(出典:『大和郡山・生駒の100年』)

参道筋商店街  
参道  
両側に発達した市街地は当時新道と呼ばれた。

山崎新町にはかつて戦前は約20の料理旅館があって接客業で栄えていた。また近郊市街地としてダンスホール、映画館、劇場、病院などが設けられ、住民のレジャー地ともなっていたという。



宝山寺駅前 (昭和40年頃)  
(出典:『大和郡山・生駒の100年』)

○参詣の記憶

・参詣者をおもてなしする門前町としてのたたずまいが残っており、現在も継承されている。

●参道筋商店街

・元町1丁目は土産物店や飲食店など宝山寺参詣人の店が多く、続いて観光サービスの料理、旅館とこれに伴う芸妓置屋などの多い門前町の特徴を持っていた。  
・現在でもその名が示すとおり参道の空間構成を各所に残しており、たたずまいを継承した店舗も見られる。



●宝山寺門前町

・宝山寺縁日等は特に参詣人が多く、門前に茶屋、飲食店や土産屋が開店した。明治以後も一層参詣者の数が増加したので旅館が出現した。  
・大正時代に石段が舗装され、参道沿いが市街地となった。  
・現在も旅館が各所に点在している。しかし、参詣の仕方も時代を経て変わりつつある。



【参道のスケール感】

・一部建て替えが生じているものの、沿道の建て詰まり感が当時の参道の雰囲気をよく表す。

【門前町の意匠・看板】

・舞妓置屋があった名残から、大きさや高さ、地色が揃えられたり、ファサードが閉鎖的なしつらえになっていたり、看板の位置が概ね統一されていたりと、一定のルールが感じられる。  
・特段に意匠に明文化されたルールがあるわけではないが、老舗の店舗の建て替えて往時の意匠を継承したと思われるものもあり、参詣者をおもてなしする雰囲気が伝わる。



(3) 駅を中心とした日常のゲート空間

駅前は通勤・通学のゲート空間として日々多くの住民に利用されています。日常の景観の印象を左右するという意味で重要な空間であり、駅舎、駅前の空間のデザインのみならず、線路や駅からの周辺の見え方、生駒山系等への眺望など、より気持ちの良い空間とするための要素があります。



●菜畑駅

- ・高架化された橋上駅として整備され、駅前にはロータリーが整備されている。
- ・駅を出ると遠景には生駒山が望める。中景には新旭ヶ丘地区の林が視界に映り、緑の重なった風景が印象的である。



●沓分駅

- ・榎木（むろき）越大宮参道と清滝街道の交点付近に位置し、江戸時代から沓分集落の入り口にあり、庄屋の豪邸跡がうかがえる。
- ・沓分駅の開設と共に商店が増加したが、現在はわずかに点在するのみである。
- ・駅周辺に商店や3階建ての建物、駐車場が集積しているからか、周囲の農村景観とのギャップが大きく感じられる。



●南生駒駅

- ・小瀬町に接続する地上駅で、東西方向は地下通路で結ばれている。
- ・小瀬町は暗峠街道と崖北道路（清滝街道）の交点にあたり、宿場町の中心として機能した。酒造りもなされ現在でも菊司酒造が店を構えている。
- ・東側に近年ロータリーが整備された。
- ・東側には斜面地に位置する小瀬町の集落や樹林地が望めるが、やや雑然とした印象もある。



【近鉄生駒線】

信貴生駒電鉄として昭和2年に開通した電車路線は昭和19年に近鉄に吸収されて近鉄生駒線となり、戦後の沿線開発が進むにつれて乗客も増加した。菜畑駅から南生駒駅まで複線化し、混雑の解消を図っている。

参考文献：『生駒市史』

○通勤・通学の住民を迎え入れるなじみの雰囲気

- ・鉄道からの車窓の景観、駅から降り立った景観を認識して、「帰ってきた」という気持ちになる。
- ・駅や沿川からの眺望や、駅から住宅地・集落への接続する空間のしつらえなどが、そのなじみの印象を左右する。



萩の台駅



菜畑駅

○駅前のしつらえ

- ・駅前のロータリーは機能的であるが故に無機質になりやすいが、植栽やシンボルツリーなどを添えて、緑のしつらえで印象を軽減している。



萩の台駅



東山駅

●萩の台駅

- ・昭和50年代の萩の台住宅地の開発・分譲とあわせて整備され、昭和55年に新設された。スマートな橋上駅舎が特徴的。
- ・駅から階段を登ったところにロータリーが整備されており、隣接して商業・業務ビルも立地している。緑が効果的に配されうるおいのある景観となっている。
- ・駅の西側は生駒山系や農地・集落等の眺望がひらけている。



駅上のロータリー



駅かも西側を望む

●東山駅

- ・駅舎は生駒市域だが、駅前ロータリー空間は平群町域である。

